

チベットの「おむすびころりん」

斧 原 孝 守

ラフカデイオ・ハーンは、明治三十五年（一九〇二）に "The Old Woman who Lost her Dumpling"（団子をなくしたおばあさん）と題した、一冊の美しい絵本を著している。これは明治中期から盛んに出版された欧文の昔話絵本の一つである。そこには、転がる団子を追つて地下の世界に入った婆が、地蔵に助けられながらも鬼に捕らわれて飯炊きになり、やがて鬼の宝の杓子を盗んで帰り豊かになるという物語が、見事な挿し絵とともに描かれている。この話が「おむすびころりん」として知られる昔話、「地蔵浄土」（大成・一八四番）の再話であることはいうまでもない。

この昔話は全国的に広く流布し、また変異も大きいところから、日本では古くから知っていたと考えられるが、意外にも文献的には近世にすら遡源することはできない。ハーンの再話が「おむすびころりん」の最も古い記録のひとつといつてよく、この昔話の素性については、ほとんど分かつていないのである。⁽²⁾

ところで、ヨーロッパの北部からトルコにかけて、転がるケーキを追つて異界へ行き、異界の主から宝をもらう娘の物語が伝わっている。この「ケーキころりん」とでも言うべき物語は、主人公の真似をした者が失敗するところも日本の話と共通しており、これを偶然の一一致とは思いにくい。ウォリン・ロバーツは、つとにこのような日欧の昔話の一一致に注目したが、しかしその一致は平行的な発展の結果であって、歴史的な関係はないとの判断した。⁽⁴⁾二つの類話群が、地理的にあまりにもかけ離れていたからである。

しかし近年、中国における昔話の採集が進展するにつれ、チベットに住む藏族のあいだにも、このような物語がまとまつたかたちで伝わっていることが明らかになってきた。しかもそこには、単なる団子のモチーフの一致だけではなく、物語の構造や要素にも注目すべき一致が認められるのである。私はここにチベットの類話を紹介し、日本の「おむすびころりん」にも、

ユーラシア的な背景があつたことを考えてみたい。

その前に、まず日本のこの物語について整理をしておこう。

一、「おむすびころりん」の形式

転がる団子を追いかけて主人公が異界へ赴く昔話といえば、日本では「地蔵淨土」の他に「鼠淨土」（大成・一八五番）が知られている。この二つの昔話は、以下のような共通した基本形式にまとめることができる。

- 1、良い爺（表の主人公）と悪い爺（裏の主人公）とがいる。
- 2、良い爺が団子を落とす。団子は転がって穴に入り、追いかけた爺も穴へ入る。
- 3、爺は異界の主と遭遇し、宝を貰つて（盗んで）帰る。
- 4、これを真似た悪い爺は失敗する。

「おむすびころりん」は、「良い主人公が異界に行つて宝を得、悪い主人公はそれを真似て失敗する」という、さらに高次の主題に還元される。つまり善惡二人の主人公の対立を外枠とし、善者が異界に行つて富を得、悪者も異界に行くが失敗する物語である。これはアールネ、トンプソンによる昔話の類型分類の、タイプ四八〇（泉の側で糸を紡ぐ女たち・親切な少女と不親切な少女⁽⁶⁾）に該当する。

AT四八〇に分類される昔話は世界的な広がりをもつていてが、実際にはそれぞれの地域で個性化を遂げた小類型として分布している。日本では「おむすびころりん」のほか、「舌切り雀」（大成・一九一番）や「猿地蔵」（大成・一九五番）「継子の苺拾い」（大成・二二三番）などがこれにあたる。これらの昔話は、共通した主題に拠りながらも、各々特徴的な趣向を発達させているが、「おむすびころりん」には以下の特徴がある。

まず第一に「転がる団子」のモチーフがある。このモチーフの印象は極めて強く、「地蔵淨土」や「鼠淨土」はしばしば「おむすびころりん」というモチーフによつて代称される。主人公を異界に導くために転がる物は、大事な物であれば何でもよそそつなものであるが、これが食料、しかも調理した食品になつてゐるのは注目すべきことである。異界と主人公を媒介する食料という要素は、「舌切り雀」における糊、「猿地蔵」における粉と対応する。この型の昔話における重要な要素なのである。

第二に地下異界がある。転がる団子によつて導かれる異界として、地下はきわめて自然である。個々の話には、必ずしも異界を地下としないものもあるが、それは一次的な変化であろう。

第三に異界の主の性格がある。「おむすびころりん」では異界の主はほとんど固定している。「地蔵浄土」では地蔵と鬼、「鼠淨土」では鼠である。これは異界の主の性格が、地下異界の構想によつて規定されるからである。地獄に鬼が棲み、また地獄で亡者を救済すると信じられた地蔵が現れるのも自然である。また地下に鼠の世界があるという構想も、鼠の生態からみて当然のことであつた。

このように日本では、転がる団子に導かれて地下に赴いた主人公が異界の主から宝を獲得し、これを真似た者が失敗するという共通した特徴をもつた物語が、「地蔵浄土」や「鼠淨土」として、語り広められていたのである。

一、チベットの類話

「おむすびころりん」の類話は、典型的な形では日本の周辺にはまつたく知られていない。ところがチベット高原に居住する藏(チベット)族を中心とする諸民族のあいだには、以下のようないわゆる物語がまとまつたかたちで伝えられているのである。

I、異界の主を怪人・妖怪とする型

I—1 藏族——四川省甘孜藏族自治州康定県魚通区

兄弟がいる。弟が団子を石の上に置いて畑を耕していると、鳥が飛んできて団子を食べる。翌日も翌々日にも鳥がやって来て団子を啄んだので、怒った弟は鳥を追いかける。鳥の口から落ちた団子は、山を転がり落ちる。団子の後を追つた弟は、山の下にある洞窟に至る。洞内に老婆がいたので、団子の所在を尋ねると鳥が食べたという。老婆は麦粉桶に命じて麦粉を捏ねさせ、子豚に食事の用意をさせ、鶏に火をおこさせ、瓢に調理させて食事を作ってくれる。弟は老婆を縛つて四つの呪宝を持ち帰り、豊かに暮らす。これを知った兄は同じように山に行き、団子を鳥に食べさせようとするが鳥は食べない。やむなく団子を投げ落として洞窟に行くと、老婆は又来たなどといつて兄を食べてしまう。⁽²⁾外枠は兄弟葛藤譚になつてゐるが、転がる団子のモチーフ、異界の主からの呪宝の獲得、模倣者の失敗など、基本的な構想はまつたく「おむすびころりん」と一致している。この地方には次の異伝がある。

I—2 藏族——四川省甘孜藏族自治州康定県

兄弟がいる。(前半は「脚折れ燕」)弟が鶴に団子をやろうとしたところ、鶴は団子をつつき落とす。団子は転がつて洞窟に入る。後を追つた弟が洞窟に入ると妖婆がいて、団

子を食べている。どうして私の団子を食べるのだというと、妖婆は魔法の子豚に薪を持ってこさせ、魔法の鶏に火を起させ、魔法の瓢に団子を作らせて弟に食べさせてくれる。やがて弟は妖婆の留守に三つの宝を持つて逃げ、豊かになる。これを知った兄も同じようにして妖婆の洞窟に行くが、

飢えた妖婆は兄を食つてしまふ。⁽⁸⁾

鳥が団子をつつくという説きかたや呪宝の性質なども、先の事例に一致している。このような内容の物語が康定県一帯に語り広められていたらしい。ここでは洞窟にいた妖婆が団子を食べていただといふ、「地蔵淨土」でも地蔵が団子を食べていたとする例が多く、団子は異界の主に恩恵を与えるものであつた。甘孜では異界の主は妖婆であるが、やや違つた例として次の話がある。

I—3 藏族——伝承地不明

兄弟がいる。ある日、弟は山で転んだひょうしにツアンパの団子を落としてしまう。弟は転がるツアンパを追いかけて洞窟に入る。洞窟の中は別世界で美しい娘がいる。娘はあなたの妻だといい、金の鍋を棒で叩いて酒食を出してくる。弟はその鍋を貰つて帰り、その娘と結婚して幸せに暮らす。これを知つた兄は、自分も山に行つてツアンパを転がす。ツアンパを追つて洞窟に入るが中には妖怪がいて、兄は食われてしまう「注九」。

外枠と転がる団子のモチーフは、先の例と同じである。ただ洞窟の妖婆がここでは美しい娘になつており、主人公と結婚することになっている。チベット周辺では、雲南省西北部に住むリス族にも類話がある。

I—4 リス族——雲南省怒江傈僳族自治州

兄弟がいる。兄が弟に借りた甌を投げ捨てる。弟は壊れた甌についた飯粒を集めて木の葉で包み、それを杭の上に置いて働く。鳥がその飯の包みをつつき落とす。飯は転がつて洞窟に入る。弟が飯を追いかけて洞窟に入ると、中にいた老人が矛で突こうとする。弟が事情を話すと、老人は魔法の挽き臼から食べ物を出して振る舞つてくれる。弟は帰りに挽き臼を貰つて帰り、豊かになる。これを知つた兄は同じように飯の包みを鳥につつかせて、転がる飯を追つて洞窟に行く。兄がそこにあつた挽き臼を持ち帰ろうとするとき、老人が現れ兄を突き殺してしまう。⁽⁹⁾

飯の包みを鳥がつつき落とすという説きかたは、藏族と同じである。鳥が閲与すべき何らかの事情があつたようと思われる。なお、ここでは異界の主が宝をくれることになつてている。宝の窃取と宝の贈与は、まったく反対の行為のようにみえるが、日本の「鼠淨土」のなかでもそれが自在に変換していたごとく、それは主人公の宝の獲得を両面から述べているにすぎない。

転がる団子のモチーフは、別の物語に結びついたかたちで怒江

州貢山県に住むヌー族にも伝わつてお⁽¹⁾り、雲南西北部の民族のあいだにも、このモチーフはそれなりに知られていたらしい。

II、異界の主が動物である型

II-1 藏族——西藏自治区堆隆德慶県曲桑郷

三人姉妹がいる。姉一人は豊かで妹は貧しい。妹はある日、うつかりツアンパの団子を落とす。団子は鼠の穴に入る。団子を追つて妹が穴に入ると、一匹の鼠がいたので、妹は団子の行方を尋ねる。鼠は奥にいる鼠に尋ねろという。妹が奥にいた鼠に尋ねると、地面を転がつて穴から出るよういう。妹がそうすると、身体じゅうに金銀や宝石が付いている。これを知った姉も同じようにして鼠の穴に入る。奥の鼠が転がつて帰れと言つたのでそうすると、身体じゅうに蠍や蝦蟇がついている。姉は川に飛び込んでおぼれ死ぬ。⁽²⁾

団子を追つて鼠穴に入り、鼠から宝をもらうというのは、日本「鼠淨土」とまったく同じである。ただ、ここには猫の鳴き真似の趣向ではなく、模倣者は悪い贈り物をもらうことになっている。藏族には、兎に招かれると説く類話もある。

ここには転がる団子のモチーフはないが、団子を与えたために鼠に招かれるという話は、日本の「鼠淨土」の類話にもある。ツアンパを追つて異界に行くのも、ツアンパを与えたことによつて異界に招かれるのも、ツアンパが主人公を異界に導くことを違つた表現で述べているにすぎない。この類話のひとつ興味は、兎神が妖怪の宝を奪うように教示するところで、これは地蔵が主人公に鬼の宝を盗むように教示する「地蔵淨土」と共通する。

II-3 ブータン人——中央ブータン

羊飼いの少女が昼食の包みを落とす。少女が追いかけようと、包みは鼠の穴に入る。少女が返してくれるよういうと、鼠は少女を穴の中に招いてくれる。鼠は何が食べたいかとういう。少女が残り物でいいというと、すばらしい食事が出る。ボロがあれば寝ることができるといえば、すばらしい兄弟がいる。弟が毎日兎にツアンパをやつしていると、一百日

II-2 藏族——伝承地不明

目に兎神と名乗る老人が来る。兎神は弟をある洞窟に案内し、ここには三人の妖怪が住んでいるが、彼らが飯を食べるとき宝を使うのでそれを盗めと教えてくれる。弟が隠れていると、妖怪達が帰つて来、石鍋から何でも出して食べて去る。弟はその鍋を持って帰り、豊かに暮らす。これを見つめた兄は弟から鍋を借りる。鍋から出た物はみな石になる。兄は弟の眞似をして洞窟に行くが、妖怪達に見つかり、目を抉られ、耳を食べられてしまう。

羊飼いの少女が昼食の包みを落とす。少女が追いかけようと、包みは鼠の穴に入る。少女が返してくれるよういうと、鼠は少女を穴の中に招いてくれる。鼠は何が食べたいかとういう。少女が残り物でいいというと、すばらしい食事が出る。ボロがあれば寝ができるといえば、すばらしい

寝床が用意される。翌朝、少女が包みを貰つて帰ると、中からは宝石が出、髪にも宝石がくくりつけてある。これを知った金持ちの少女は、同じようにして鼠の穴に入る。少女がごちそうが欲しいというと残り物が出、気持ちのいいベッドで寝ているといえばボロが与えられる。翌朝、少女は包みを貰つて帰るが、中は糞や枯れ草で、髪には糞が付いている。

これはII-1の事例の異伝である。異界の主が鼠になつているが兄弟葛藤譚の外枠をとらず、娘が贈り物をもらいう話になつてゐるのは、ヨーロッパのAT四八〇の基準形式に近い。

III、周辺の類話

III-1 藏族——東チベット、カム地方

貧しい弟が、豊かな兄の婚礼に招かれたと勘違いして出かける。兄の家の使用人は料理用の骨を与えて弟を追い帰す。

これを恥じた弟は骨を藪に捨てて帰る。後で骨を拾いに行くと、骨は無く大きな足跡がある。弟は足跡をたどって山中の家にたどり着く。食事の用意がしてあつたので、弟はそれを食べる。やがて大男と小男が帰つて来、「一人は魔法の小箱から食べ物を好きなだけ出して食べ、眠つてしまふ。」

弟は小箱を盗んで帰り豊かになる。これを知つた兄は弟と同じように骨を捨てて足跡をたどり、山中の家に行く。食

III-2 藏族——西藏自治区那曲県

貧しい弟が、兄に名を呼ばれたと思って行くが兄に罵られる。兄の落とした麦粒を拾つて枕元に置いて寝る。朝になると麦は無くなつており、雪の上には足跡がある。弟が足跡をたどつて行くと、洞窟がある。そこに隠れていると松明を持つた男たちがやってきて魔法の椀から食べ物を出して食べる。朝になると男たちは消えたので、弟は椀を盗んで帰り豊かになる。これを知つた兄は、弟の真似をして洞窟に行くが、男たちに鼻や耳をもぎ取られてしまう。

異界に導かれる趣向として、このような足跡をたどるという説きかたにも、一定の広がりがあつたようである。これらの事例は、後述する中国の「長い鼻」における穀穂を鳥に盗まれるモチーフと関係があるようと思われる。

III-3 藏族——青海省黄南藏族自治州同仁県

べ物を食べて隠れていると帰つてきた大男と小男に見つか
り、立木に変えられてしまう。⁽¹⁵⁾

ここには転がる団子のモチーフはない。しかし骨を盗んだ者の足跡を追つて異界に至るという説きかたは、食料が自分で移動しないだけで、つまりは「転がる団子」と同じことである。この話には異伝がある。

進むべき方向を占う。棒は地面に入り、地面に裂け目ができる。

できる。

弟が入つていくと路上に菩薩像がある。弟は像を頭上に戴いて絆をよみ岩穴に安置する。さらに行くとテントがあつて中に食事の用意がしてある。弟はそれを食べ、羊の膀胱に糞を入れて膨らませておく。やがて馳に乗った女が帰つて来ると、人が来たようなのでラマを呼んで調べてもらおうといい狐を連れてくる。狐が膀胱の上に乗ると、

膀胱が破裂して狐は氣絶し、女も逃げる。弟はその家の羊を連れて帰つて豊かになる。これを知つた兄が真似をして地下へ入る。菩薩像があるが蹴り倒す。テントに隠れていると女が帰つてき、兄の頭の上で針で十字（18）を書く。兄の頭は大きくなり、床に頭をぶつけて死ぬ。

かなり変化した類話であるが、細部の要素は興味深い。^{（19）}では方向を占う棒が主人公を異界へ導く役割を果たしている。地下に導かれた主人公が最初に菩薩像と出会うというのは、日本「地蔵淨土」を思わせる。しかも菩薩像をたいせつに扱つた弟が宝を得、粗末に扱つた兄が失敗するというのも同じである。全体的に藏族の牧民的な色彩が強く現れているが、羊の膀胱を破裂させて女妖を驚かせて羊を盗むという構想も、「鼠淨土」などの鳴き真似によつて驚かせる趣向と共通する点がある。

1、豊かな兄と貧しい弟がいる。

2、弟が食べ物を落とすと、それは転がつて穴に入る。

3、弟は穴の中にいた異界の主から宝を得て帰る。

4、弟の真似をした兄は失敗する。

このような形式は、ほとんど日本の「おむすびころりん」と一致する。しかもチベットでも地下の主が鼠になつてゐる型がそれなりに広がつてゐることは、日本の「おむすびころりん」が「地蔵淨土」と「鼠淨土」に分化して展開してゐるのと共通している。また細部の趣向を見ても、転がる団子を鬼が食べてゐるという説きかたや鬼を驚かせる趣向、鬼の宝を奪う指示や地下の仏像など、日本の「おむすびころりん」と部分的にきわめてよく似た要素や趣向がこの地域に流布してゐることも興味深い。物語の構造的な一致がそれぞれの地域でよく似た趣向や説きかたを生み出していたこともあるが、これだけの共通点が偶然に生じたとは考えられない。チベットと日本の類話には、歴史的な関係があつたと私は考へてゐる。

三、ヨーロッパの類話

「」に紹介したチベットとその周辺に伝わる「おむすびころりん」の類話の基本的な形式は、以下のように整理することが

転がる団子のモチーフを発端にもつAT四八〇の伝承(the

Rolling Cake form)は、ヨーロッパにもある。ウオリン・ロバーツは、AT四八〇の類話を世界的に集成し詳細な比較をおこなっているが、それによればこのモチーフをもつ類話は、以下の地域に及んでいる〔() 内話数〕。それは、ノルウェー(1)、スウェーデン(10)、フィンランドのスウェーデン人(6)、デンマーク(1)、ドイツ(3)、フィンランド(32)、エストニア(1)、ロシアのフィノ・ウゴル系諸族(2)、チエコ(6)、スロヴァキア(1)、ブルガリア(2)、ブルガリアのジプシー(1)、トルコ(4)の地域で、北欧に分布の中心があり、東欧を経てさらに小アジアにわたっている。⁽¹⁹⁾ このようなまとまつた分布は、このモチーフがヨーロッパの異界訪問譚の発端として、必ずしも恣意的に結合しているものではないことを示している。

ロバーツによれば、このような物語は継娘と実娘との枠組を持つものが一般的で、転がる物はケーキかパンである。わずかに糸玉や紡錘の例もある。異界は一軒の家であるのが多いが、フィンランドでは地獄と説く場合が多いという。ロバーツはこれをフィンランドの特色だとみていて、異界に至る道筋で主人公はさまざまなる者と出会って頼みを果たし、老女または男と出合う。そこで主人公は異界の主の仕事を果たして褒美を貰う。もつとも一般的な褒美は二つの箱の選択である。継娘の箱からは金が出、真似をした実娘の箱からは蛇が出る。⁽²⁰⁾

ヨーロッパに流布する類話は、日本やチベットの物語に比し

て複雑な内容をもつているが、その骨子はほとんど変わらない。残念なことにロバーツは、日本の「おむすびころりん」は、むしろAT五〇三（小人の贈り物）に近いとして、直接の考察対象には取りることはなかつたが、しかし日本にも転がる団子のモチーフがまとまつて伝承されていることには注目し、「おむすびころりん」を詳しく紹介している。⁽²¹⁾ ただロバーツは、中間地域における情報の欠落によって、相互の関係を論じるまでには至らなかつたのである。⁽²²⁾

いま、われわれにとつてチベットに伝わる「おむすびころりん」が重要なのは、それがヨーロッパ・トルコ類話群と日本類話群の間を埋める、まさに中間地帯の類話群であるからである。ヨーロッパと日本の一致といえば、偶然の一致か、あるいは近代になつてからの影響という可能性も考えてみなければならぬ。しかし中間のチベットに類話がまとまつて伝わっていたとなると、その背後に何か共通した物語の流れがあつたとみなければならないのである。

四、中国の「長い鼻」をめぐつて

チベットと日本に「おむすびころりん」がまとまつて分布するという事実は、東アジアの昔話の比較研究にとつても興味深いことである。とくにチベットと日本のあいだにあたる中国・朝鮮に、なぜ「おむすびころりん」が流布していないのか、と

いうことが問題になる。

葛藤譚の外枠をもち、主人公が鬼の宝を奪うという物語は、中国にも広く伝わっている。この話は「長い鼻」などと称され、漢民族と周辺少数民族のあいだに広く流布する有力な昔話の一つである (Ting,no.613A)⁽²³⁾。その基本的な形式は以下のように整理できる。

- 1、弟が兄に穀物の種を借りたところ、兄は種を蒸して貸す。
弟がその種を播くと、一本だけ芽を出して大きくなる。
その穗を鳥が奪つて逃げたので、弟は追いかける。
- 2、弟は山中で魔法の槌を使つて群鬼を見る。
- 3、朝になると鬼が帰つたので、弟は槌をもつて帰り豊かになる。
- 4、弟の真似をして山に行つた兄は鬼に見つかり鼻を伸ばさられる。
- 5、兄は弟の魔法の槌で鼻を短くしようとすると、鼻を短くすぎてしまふ⁽²⁴⁾。

この昔話は歴史的に古くまでさかのぼることができる。末段を欠いたかたちで唐代の隨筆集『酉陽雜俎』に新羅の話として見えるほか、十三世紀に成立したとされる蒙古の仏教説話集『シッディ・キユル』にも採録されており⁽²⁵⁾、東アジアでは古くから有力な昔話のひとつであった。韓国に伝わる「金の砧、銀

の砧」(崔、四六〇番)は、「長い鼻」に比して発端こそ単純であるが、兄弟葛藤の外枠を持ち、兄が体の一部を引きのばされるというモチーフもあって、「長い鼻」のひとつ変異型とみえることができる。

中国大陆に流行する「長い鼻」は、基本的には異界に導かれた主人公が異界の主から宝を得、真似をした者が失敗するという構想をとり、「おむすびころりん」などと同じAT四八〇の小類型のひとつである。しかしこの物語では発端と末段が大きく変化し、特に結末の模倣者の失敗の部分に興味の重心が移つている。問題は、チベットと日本において構想を等しくする小類型が、何故中間の中国においてこのような特異な形態をとつているのかという点である。その理由を明らかにすることは難しいが、世界的に流布する昔話が中国文明圏に入ると変質するという現象があり⁽²⁶⁾、おそらく「おむすびころりん」においてもこのような事情が当てはまるのであろう。

むすび

以上に述べたように、「おむすびころりん」の類話は、北欧から東欧を経て、トルコ、チベット、日本と、ユーラシア大陸を横断するかたちで分布していた。転がる団子のモチーフの一致だけではなく、いずれもそれがAT四八〇の発端をなし、特徴的な小類型を構成していることが重要である。おそらくその背

後には、ユーラシア大陸を東西に動いていた大きな物語の流れがあり、それが地域によって古い形を残していたのであろう。その東端が日本の「おむすび」や「りん」だったことになる。

〔謝辞〕

本稿執筆にあたり、小島環禮先生からは適切な助言をいただき、また西脇隆夫先生からは、貴重な資料の原本を見せていただき便宜をはかりていただきた。ここに記して感謝申しあげます。

注

- (1) Lafcadio Hearn, *The Old Woman who Lost her Dumpling.* 一九〇一年 長谷川武次郎 東京市日本橋区
- (2) 「れを日本の民俗信仰から説く説もある。(五来重『鬼むかし』角川書店 一九八四年 一三〇~一六二頁)。転がる団子のモチーフは、死者の頭陀袋に入れる餅や握り飯から生まれたとしている。
- (3) Roberts, Warren E. *The Tales of the Kind and Unkind Girls, AA-TH 480 and Related Tales* (Supplement Serie zu *Fabula Zeitschrift für Erzählforschung*, Reihe B: Untersuchungen Heft 1) 1958, p.125.
- (4) Roberts, Warren E. *The special forms of Aarne-Thompson type 480 and their distribution*. *Fabula* vol.1, 1958. p93.
- (5) 関敬吾もこれら二つの昔話を「同一根元から派生したもの」とみている。関敬吾『日本昔話大成』第四卷 角川書店 一九七八 一四九頁。
- (6) Thompson, S. *The Types of Folk-Tale* (FFCommunications no.184) 1981, pp.164-166, no.480
- (7) 四川省甘孜藏族自治州文学藝術連合会『藏族民間故事』上集 一九九〇年 三三四六~三四八頁。
- (8) 程聖民〔編〕『康区藏族民間故事選』四川民族出版社 一九八四年 一〇七~一一三頁。
- (9) 『西藏民間故事選』西藏人民出版社 一九八四年 一一〇〇~一一〇四頁。
- (10) 怒江傈僳族自治州〔傈僳族民間故事〕編輯組〔編〕『傈僳族民間故事』雲南人民出版社 一九八四年 二七四~三七五頁。
- (11) 左玉堂・葉世富・陳榮祥〔編〕『怒族獨竜族民間故事選』上海文藝出版社 一九九四年 一五六~一五九頁。
- (12) 中国民間故事集成・西藏卷編輯委員会〔編〕『中国民間故事集成・西藏卷』中国ISBN 中心出版 一〇〇一年 五九九~五九六頁。
- (13) 田海燕・芻燕〔編著〕『金玉鳳凰2』少年兒童出版社 一九八三年 五五~六〇頁。
- (14) クンサン・チョンデン〔著〕今枝由郎・小出喜代子〔訳〕『アーテンの民話と伝説』白水社 一九九八年

- (15) Thompson注 (6) pp.164-166
- (16) ペラ・ギャルボ [監修] 関根房子 [編]『チベット民話28夜物語』山手書房新社 一九九二年 四〇～五四頁。
- (17) 中国民間故事集成・西藏卷編輯委員会、注 (12)、五九〇～五九一頁。
- (18) 青海省黃南州民間文学集成辦公室 [編]『黃南民間故事』一九九〇年 三三三五～三三七頁。
- (19) Roberts, 注 (3) pp.125.
- (20) Roberts, 注 (3) p.125-127.
- (21) Roberts, 注 (3) p.159.
- (22) Roberts, 注 (3) p.126.
- (23) Nai-Tung Ting; A Type Index Chinese Folktales.(FFCo mmunications,no 223) 1978,pp.112-114. Type no 613A
- 〔= 鄭建成ほか [訳]『中国民間故事類型索引』中國民間文芸出版社 一九八六年 一一六～一一一頁。〕
- (24) Ting, 注 (23) pp.112-113. [訳] 一一六～一一七頁。
- (25) 今村与志雄 [訳注]『酉陽雜俎』第四卷 平凡社 一九八一年 三三一～三四頁。
- (26) 吉原公平 [訳]『蒙古ンツディ・クール物語』ぐるりあ・そやえい 一九四一年 一一〇六～一一八頁。第十四話「欲深な弟」
- (27) 崔仁鶴『韓國昔話の研究』弘文堂 一九七六年 一一一〇～一一一一頁。
- (28) 拙稿「東アジアの説話の比較研究の課題」『比較民俗学会報』第一三卷第四号 比較民俗学会 一九九二年 一一一頁。
- (おのはら・たかし／奈良県立畝傍高等学校)